

## 五 東京外国語学校の創立

この時以来、わが国の国立の外国語学校では、ロシア語教育が一切途絶えてしまう。その間のロシア語の人材をかくらうじて確保したのが、駿河台のロシア正教会の露学校であった。その後日清戦争の勝利によって、大陸への進出を画策する日本にとって、満州、朝鮮の利権をめぐる、日露両国が早晚対立することが必至となった一八九七（明治三十）年に今度は商業学校附属として外国語学校が創設されることは、通史篇で述べた通りである。同じ年に各地の陸軍幼年学校でロシア語が正課となるのも偶然ではない。第二次外国語学校は明らかに時の國際情勢に促されて創立されたわけである。

英、仏、独、露、清、韓の七語科で九月十一日から授業が始まるが、翌年には井上哲次郎、加藤弘之等が外国語学校独立の建議案を提出、国会での承認を得て、一八九九（明治三十二）年四月四日の勅令第一一八号によって、伊語科を増設し東京外国語学校として独立し、神田乃武が校長心得となる。本科三年、別科（これは速修を目的とする官立学校初の夜間部であった）二年の修業年限であった。

この年の露語科の生徒数は本科四〇名、別科一九名であった。翌一九〇〇年、文部省専門学務局長上田萬年が校長事務取扱となり、彼の推挙で外語の露語科別科生となるのが、東京帝国大学言語学科卒業の八杉貞利である。時代状況を反映して学科規程は猫の目のように変わり、一九〇四（明治三十七）年には別科が専修科と改称され、〇六年には露、清、韓語学科に修業年限一年の速成科が置かれることになる。なお先走って言うと、語科が語部と改称され、各語部に文科、貿易科、拓殖科が設けられ、英、独、仏の第二語学が置かれるようになるのは、一九一九（大正八）

年、長屋順耳校長の時代のことである。

### 設立当時の露語科

設立当初は鈴木於菟平が講師（以下講師という場合、非常勤講師のこと）であつたが、独立と同時に古川常一郎（一八九九—一九〇〇年。以下在職期間を示す）、ウラジミール・ファメンコ（一八九九—一九〇〇年）が専任教授となつている。オデッサ大学出身のこのお雇い外国人は比較言語学者で、ギリシヤ、ラテンの古典語にも通じており、月例となつた教師親睦会では毎回アカデミックな講演をしている。たとえば「露西亜語学研究の必要なる所以を論ず」という講演の全文が一八九九（明治三十二年）の「校友会雑誌」に収録されており、そこでは英、独、仏に比べて露語の使用範囲が限定されているのは、ロシアが遅れて文明国の仲間入りをしたためであり、「日本人の如く、領土の関係上、露西亜と近接する諸国民、及び露語に通曉すれば他日露西亜帝国と多少進歩的なる通商をなし得べきと覚悟せる諸国民にとりては、露語が前途斯の如き」として、その将来性を強調し、印欧語族に占めるスラヴ語の位置を言語学的に詳述した上で、ロシア文学の重要性にも言及し、プーシキン、レールモントフにつづいて、トルストイ、ドストエフスキー、さらにシチエドリンの名を挙げ、「ゴロヴリョフ家の人々」はドストエフスキーの傑作と比べても遜色ないと断言しているのは注目に値する。一八九九年には古川の推薦で長谷川辰之助（一八九九—一九〇二年）が教授となつているから、二葉亭もこのファメンコの講演を聴いたはずである。なおこの年の授業料は二〇円、また副科と称して三年生のために経済学、国際法、教育学の三学科が新たに置かれ、志望者は一、二学科を兼修することができると思はれた。ちなみにこの年の入学試験に「露西亜帝国の現況に達せし主なる事蹟を述べよ」という問題が含まれていたのは興味ぶかい。

ここでファメンコ以降のロシア人教師名を列記しておこう。括弧内は在職期間である。外語関係の資料とロシア側の記録には異動があるが、一八九九（明治三十二）年から二年間スバルヴィン（一八七二—一九三三）が非常勤講師として教鞭をとったとされている。彼はペテルブルグ大学で旧外語のロシア語教師であつた黒野義文に日本語を学び、来日して、おそらく二葉亭の斡旋によって、外語でロシア語を教えることになつたのであろう。彼こそはウラジオストックの東洋学院（後の極東大学）における日本学の基礎を築く人物であり、ここでは一九〇三年に外語を卒業する松田衛も教鞭をとることになり、スバルヴィンは松田や川上秀雄の協力を得て、『日本語読本』、『口語日本語読本』といった教科書を編纂している。外語を棄て、日本を棄てた黒野義文の弟子が、同じく愛弟子の二葉亭の尽力で日本語研究を発展させ、ロシアを代表する日本語学者となり、さらにのちに外語の教授となる松田衛とウラジオストックで同僚となるというのは、奇しき因縁である。

#### 外国人教師の系譜

外国語学校の資料でみるかぎり、初代の外国人教師はパーヴェル・スムイスロフスキー（一九〇〇—二年）、ついでヤーコフ・ユゼフオーヴィチ（一九〇二—〇三年）、ラファエル・フォン・ケーベル（一九〇四—〇六年）、アレクサンドル・ペトロフ（一九〇六—〇九年）とめまぐるしく変わる。その後一九〇九（明治四十二年）から一九四〇（昭和十五年）年までほぼ三〇年間にわたつて教鞭をとるのが、ベオグラード生まれのセルビア人でペテルブルグ大学物理数学科出身のドシャン・ニコラエヴィチ・トドロヴィチである。この人物が生徒たちに与えた影響は非常に大きい。そのユニークな授業ぶりについては後に述べることにする。彼がアメリカに去つた後（トドロヴィチはカリフォルニア州パロアルト市で、一九六三〔昭和三十八〕年八十八歳で亡くなつてゐる。伝統的な日本をこよなく愛し



ヴァルヴァラ・ドミトリエヴナ・ブブノワ

た人だったという)、一九四一(昭和十六)年よりアレクサンドル・パヴロヴィチ・ミチュエーリン(職員録には米秋林、元露国人と記載されている)とポーランド系のボリス・アントーノヴィチ・ストルジェシエフスキーが同時に雇われている。

非常勤の外国人講師には、マルチン・ニコラエヴィチ・ラムミング(一九二五―二七年、後に東独科学アカデミー正会員となる彼も、黒野義文の教え子である)や、すぐれた前衛画家であり、棟方志功等とも親交があり、今祖国ロシアでその再評価が進んでいるヴァルヴァラ・ドミトリエヴナ・ブブノワがいた。ブブノワは一九二七(昭和二)年から一九四五(昭和二十)年まで教鞭をとり、ロシア文学作品、とくにロシア詩の講読を担当した。名門貴族の出であるブブノワの文学的素養と教育的情熱は、生徒たちに多大な感化を与えた。米川正夫、中村白葉などブブノワ就任以前の卒業生もロシア文学の翻訳に際しては、疑問点のチェックを受けたという。米川はその自伝『鈍・根・才』

(河出書房新社、一九六二年)でブブノワの「知性と教養に魅せられ、もし自分に妻子がいなかったら、……求婚した。」と告白しているほどである。なお彼女(戦後は早稲田大学露文科でプーシキンの『オネーギン』の講義をしているが、その素晴らしさは伝説となつている(ついでながらわが国におけるバイオリンの教育の基礎を築いた小野アンナはブブノワの実妹である)。またブブノワの夫のゴロフシチコフも一九三五(昭和十)年から二年間(除村教授留学中)非常勤

講師となっている。

ここで初期のロシア人教師について緒方整肅（明治三十六年卒）の貴重な談話が『東京外語ロシヤ会会報』第一五号（一九六七年）に載っている。それによると緒方は中野天門が参謀本部の出資で一八九八（明治三十一）年に札幌に設立した露清学校に籍を置いていたが、この学校は乱脈経営のために一年もせずに潰れ、軍は責任をとって生徒全員を東京外語に転校させたというのだ。彼の言葉を引こう。

一年生は二十五名ほどいたでしょうが、その中には荒木貞夫中尉（後の陸軍大臣）も委託生として来てました。上級生には長谷川作次、井田孝平（後のハルビン学院長）の諸氏がおりました。先生には、長谷川辰之助（二葉亭四迷）のほか鈴木於菟平、藤堂四郎、小島泰次郎（ともに旧外語出身、後二者は非常勤）の諸先生、ロシア人ははじめユゼフオーヴィチ先生でしたが、この人の帰国後は露清語学校のスミスロフスキー氏がそのあとを引継ぎました。藤堂先生はもと外務省書記生で現地生活が長かったせいでしょうか会話がうまく、小島先生は陸大教授が本職で、外語や参謀本部にも関係しておりました。ところで例のスミスロフスキーは漁師あがりの田舎者（実際には中野天門がウラジオストックから招いた陸軍中尉——筆者）で、黒板に何か書いて手がチョークでよごれると、ハンカチで拭くかわりにペロペロなめるような男でした。それにくらべると前任者のユゼフオーヴィチ先生はいかにも教師風の立派な人でしたが、おしいことに胸が悪かったようです……

ここではユゼフオーヴィチが前任者となっているが、これは緒方の記憶違いであろう。『校友会雑誌』（一九〇六年）によると、日露開戦前夜にユゼフオーヴィチが帰国を強く希望して退職、講師の小島泰次郎も出征命令を受けたため、欠員が生じ急遽東京大学で哲学を講じていたケールを雇い入れ、さらに露都留学中の八杉貞利を召還し、教授にしたとある。夏目漱石や有島武郎、芥川龍之介等によってその学識を絶賛されているケール博士については、改めて述べるまでもないが、この人物がたとえ一年間とはいえ、外国語学校でロシア語を教えていたことはあまり知



北島常晴（初等文法の授業の厳し  
さで有名）

日本人教師たち

られていないのではなからうか。  
ラファエル・フォン（アヴグストヴィチ）・ケーベル（一八四八一—一九二三）はロシアに帰化した二等文官のドイツ人の父とロシア人の母の子として、ヴォルガ河畔の商業都市ニージニー・ノヴゴロドで生まれており、母語はロシア語である。モスクワ音楽院ピアノ科に学び、チャイコフスキーやルビンシュテインにも習っている。その後ドイツに留学して、イエナ大学、ハイデルベルグ大学で哲学を専攻する。この時ベルリン大使だった青木周蔵の依頼で、ハルトマン教授の推薦を受け、東京大学に一八九三（明治二十六）年に着任し、哲学の講義を担当することになる。ケーベルは上野の東京音楽学校でも教えていたから、外国語学校は兼任だったのであろう。

つぎに日本人教授陣を列記しておこう。括弧内は在職期間を示す。二葉亭につづいて鈴木於菟平（一九〇二—二三年）、八杉貞利（一九〇三—三七年）、北島常晴（一九〇八—一九一九年、明治三十七年卒）、松田衛（一九一四—一九二二年、明治三十六年卒）、松永信成（一九一九—一九二二年、その後大阪外語に転出、大正三年卒）、除村吉太郎（一九二四—四〇年、大正七年卒）、佐藤勇（一九二八—六五年、大正十五年卒）

が専任教員、ほかに非常勤講師として前出の小島泰次郎、藤堂四郎（旧外語）、河津敬治郎（旧外語、

一九〇八一—二九年、陸大教授)、藤平文蔵(明治三十三年卒)、穂積永頼(東亜研究所、明治四十一年卒)、馬場哲哉(大正三年卒、ロシア文学者江川卓の父、筆名外村史郎)、奥村泉(大正九年卒、幼年学校教授)、井桁貞敏(昭和四年卒、海軍兵学校教授)、中村長三郎(白葉)(明治四十五年卒)が教鞭をとっている(以上着任順)。

それでは明治三、四十年代の露語科の授業内容はどのようなものだったか? 前述のとおり三年制で専攻語は週二四時間(ただし五〇分授業)、体操三時間、二年次から志望により英語を兼修することができるとあるから、まさにロシア語演である。また最終年次では「正科語学の教授時間内に於いて当該国の文学の概要を教授す」と定められていた。旧外語のように、詳細なカリキュラムや教科書名は記録に残っていないので、授業内容については、当時の生徒たちの証言によるほかない。

### 教授時代の二葉亭

まずは教授時代の長谷川二葉亭の授業風景を清水三三(後のハルビン学院教授、明治三十六年卒)の回想によって再現してみよう。

明治三十三、四年の事であるから、もう今から半世紀も前の話であるが、私は東京外語在学中二年間、長谷川先生に露語の授業を受けた。

先生は始業のベルで教場に這入ると、デスクを前にして、あの渋い厳めしい面貌を以て椅子にすわり、先ず眼鏡を外してハンカチで拭き、更にこれを掛けてから生徒の出欠を取り、それから生徒の方に向き直って鉛筆の尖きで一々生徒の頭数を数えて出欠簿の数と照らし合わせ、そして後、名講義に入るのである。先生の講義は生徒に取っては実に分秒といえども貴重なもので、講義の始まる迄の待ち遠しいこと、もどかしいことと云ったら譬えようがない。生徒は一同固唾を呑んで講義に



二葉亭四迷 (明治41年冬 ペテルブルグにて撮影)

聴き入り、授業の終わりを知らせるベルの響きはいつも我等に、ああ惜しいという嘆声を心の底から絞り出させた。生徒が教場で習っただけの言葉は自由に使いこなして活用出来るようにすることと、一年生の時に訳読の上で文法を頭に叩きこむ(文法の時間は無分別に定めてあったが)ことが先生の授業の方針であって、其講義は微に入り細に亘り、反復丁寧を極めた。従って進度は遅い。一度講義したところは次回には先生が之を応用して露文を作つて来て、露語で質問し、露語で答えさせた。或時、先生は生徒に、「君等は毎日何時間勉強するのか」と訊ねられた。これに対し、生徒は二時間とか三時間とか各自答えたが、先生の言われるには、「私はこの一時間の授業を準備するのに今朝の一時までかかった」。斯様に先生の授業振りは実に熱心であつたので、其講義の言々句々は直に生徒の血となり肉となつて活用することが出来た。露国文豪の作品を講義するときには、言葉の上に現れた作者の書いた心持ちを伝えることに殊に骨折られた。先生が語句の意味を生徒に質問し、生徒が之に答えたとき、「ああ当たつた、当たつた」とか、「それより、もっと強い意味だ」とか「それでは強すぎる」など言われた。また或時は、先生が文中の一句を捉え、「実に千古の名文だ」など言いながら深く感に打たれた面持ちで、教室内を往きつ戻りつした有様は今尚眼前に彷彿している。

(「恩師二葉亭四迷の想い出」、『ソ連研究』、一九五二年八月)

あまりに引用が長くなつてしまつたが、外語時代の二葉亭についてこれ以上に生彩のある描写を筆者は知らない。それにしても教師としてなんたる徹底ぶりであろうか。現在二葉亭の墓は奇しくも西ヶ原キャンパスのすぐ隣の染井霊園にあるが、これは二葉亭の十三回忌に同窓生と教え子たちの寄付によつて建立されたものである。僅か二年の在職にもかかわらず、こうし





二葉亭四迷の墓（書は宮島大八）

たことが起こりえたのも、二葉亭の教育者としての情熱が生徒たちに強烈な感化作用を及ぼしたことの証であろう。

しかも二葉亭は単なる語学の授業では満足せず、憂国の士としてロシアの国情研究の必要性をも生徒に訴えていた。古川常一郎の病氣退官後、露語科主任となった二葉亭は、「語学校の方も、近頃は主任という重荷を背負わせられ終日学校の事にのみ齷齪たる有様、大いに閉口致居候」と坪内逍遙に嘆いている。

「氏の本領は小説家でないと同時に、一介の語学教師に止まらず、早くから露国に押渡って何か実業の方面に雄飛しようと言う野心があったので、是は当時露語を研究した連中が総て抱いていた野心で我々とも其点に於て話が善く会って居た」と同僚の鈴木於菟平も語っている（『忠実なる教師』）が、この点は大體進出をうかがっていた軍部とは目的は違っても、当時ロシア語に携わる者にある程度共通した認識であったことは、銘記する必要があるだろう。結局二葉亭は外語教授の職を捨ててしまう。その理由は必ずしも定かではないが、こんな証言がある。「海外留学生の選定に就いて校長高楠氏と意見が衝突したのが近因であったが、日頃、校長と教授方針を異にしたのが、偶々留学生問題で爆発したものといった方が適切であろう」（横山源之助『真人長谷川辰之助』）

ここで言及されている留学生問題とは、二葉亭がその才能を高く買っていた教え子井田孝平（後のハルピン学院初

代院長)ではなく、八杉貞利が抜擢されたことで校長と衝突したとされている(事の真偽は定かではないが、ハルビン学院ではこの一件は伝説になっていたという)。その後の外語における八杉の功績を考えると、二葉亭の人選が必ずしも正しかったとは言えないが、ただ日露戦争勃発と同時に第一軍に通訳として志願したのが井田であることを考えると、国士としての気概という点で両者が意気投合していたとは想像できそうだ。

## 六 明治期の露語科の授業内容

### 驚くべきグレーポフの文法書

当時使用された文法教科書はグレーポフ著、岩沢丙吉訳の「露西亜文法」であった。今では知る人も少ないこの教科書の著者セルギー・グレーポフは一八八八(明治二十一年)年に来日した露国公使館付司祭であり、岩沢丙吉はニコライ堂附属神学校を卒業、ペテルブルグ神学大学へ派遣されて神学士の学位を取得、一八八八年に帰国して神学校教授を務めていた(岩沢は後に陸軍士官学校教授となり、一九三五〔昭和十〕年退官、四三年に八十歳で死去した)。

一八八八(明治三十一年)年に初版が出たこの教科書は前編形態論、後編文章論からなり、各課のすぐ後に練習用例文とその和訳をつけたもので、菊判四三二ページの大冊であった。前編では不規則変化の稀用の名詞、動詞まで網羅的に細大漏らさず取り上げられ、詳細周到な説明が付けられている。活字はすべてウラジオストックから取り寄せたものであった。

一九〇一(明治三十四)年に出た第二版「改訂増版露西亜文法」では、一行の字数、一ページの行数を増やし、活字も五号と六号を併用し、さほど重要でない事項は六号活字で組み、練習問題とその和訳は一括して後に回してある。